

カルロス・ルイス・サフォン著 木村浩美訳「風の影(上)」集英社文庫、集英社 2006年7月25日刊を読む

本を読む者にとって、生まれてはじめてほんとうに心にとどいた本ほど、深い痕跡を残すものはない。はじめて心にうかんだあの映像^{イメージ}、忘れた過去においてきたとっていたあの言葉の余韻は、永遠にぼくらのうちに生き、心の奥深くに「城」を彫りきざむ。そして——その先の人生で何冊本を読もうが、どれだけ広い世界を発見しようが、どれほど多くを学び、また、どれほど多くを忘れようが関係なく——ぼくたちは、かならずそこに帰っていくのだ。

ぼくにとっては、「忘れられた本の墓場」の迷宮で見つけたまさにこの一冊が、そんな魔力で、以来ずっと、ぼくを虜にしつづける本になる。

P20

[コメント]

夏休みの読書としておすすめする図書の1冊目。読み始めたら止まらなくなる本とは、この本のことを言うのかも。木村浩美さんの訳もていねいでわかりやすい。

— 2012年8月1日 林 明夫記 —